

復旦大學校史

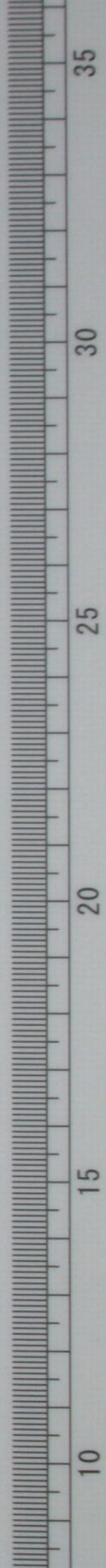
三

特別

14

1919

237





176512

漢書卷之三

光緒三十二年四月下浣起筆



日永改石保以善篆刻之成也  
 五岸のありしを以て也余は心  
 人をし備ふ時 唯此大念ふに  
 又も刻る余(止) 唯此大念ふに  
 多刻成り刻る善ん未だせく  
 と善ん流るる刻る善ん未だせく

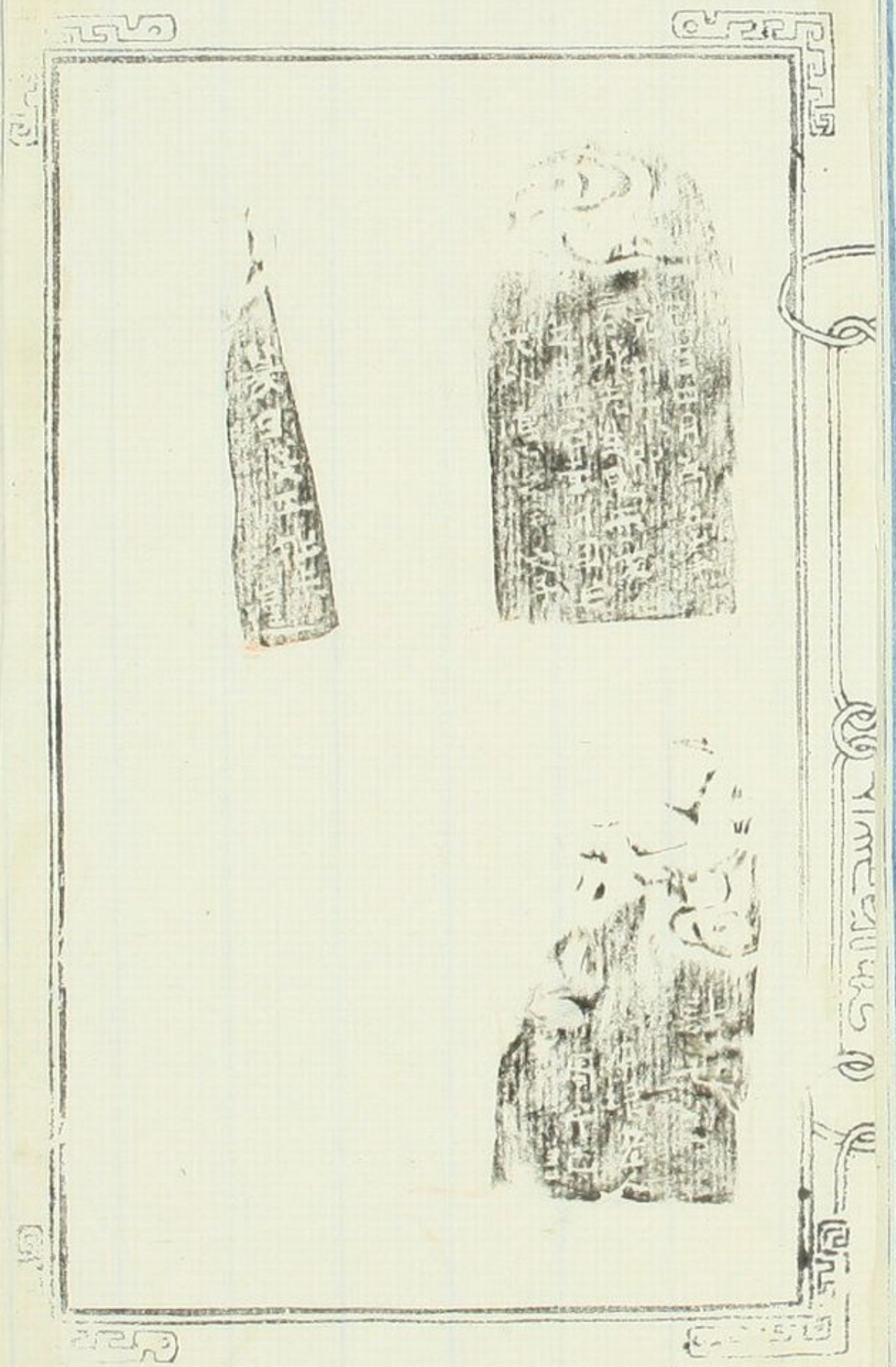
欵云

正西四月為主峰久刻一印  
其成氣をえ而意之出此石素の  
因北北以意之余之より日浅工杜  
未定計也

石像多人肉并記

如千七多んたる意ありし 石像並に信の印人  
の跡入る余を此の世と改むる印つて  
其の意め心を移す也

石像並記



淡お花二の評任併も所す

東林堂製

○井上尾の印分お経河に画幅をニラし  
多々危り余所を一幅と評し某をそと  
摩の國を治就云このはくあると柔柳を  
此の僧生をくく埋めんはうとくふと以て  
名をくくお換る任しるうか、殊に伊  
豆をくく此字をくく、をくく摩をくく、  
くくおくく分款ありと

慧心薰

(曹洞宗) 相模成願寺の禪僧なり

慧心薰字は風外 上野國碓氷郡土鹽村の人なり幼にして  
出家す學諸宗を綜ふ屢々名宿を叩き遂に大事り畢



長文幅

古名物也

前記と書きたる  
ことありし

横幅 四紙 望一尺二寸 幅二七尺

贈香圓縁河序 仰字長文

柳澤保惠藏

尺牘 漢文 尺一尺六寸五分 文のまじりし 奥積落  
泊り 昔々 昔

妹尾満壽藏

横幅 望一尺二寸 幅四五尺

泊り 夏の日候 扇上和款

柳澤保惠藏

但練自言

政活

口上 花

尺牘 七寸五分

木村重太郎 跋七附

口上 花

琴弓

昔々一紙五分 尺一尺二寸五分

但練の子孫  
藏生保惠藏

古今和歌集 二冊

錦襪 志壯きくも 和名御字 拾女  
美世

口上 花

九大家の逸句

似律山房

四上巻

箱集

日

似律少人初集

日

右三行を何れも似律山房の四字を欄  
心と刻する果安に行體をも言し  
法行のすまふまはるる昔きくまはるる  
形はぬをさへくらし

以上の如く三浦栲栞も花の御幅を簡  
二三通出て是れ又雨木林南を不

花の聖像に讀と書きたる一冊を栲  
栞の中央に掲げありしをすを括めて  
謹書解して是れ御幅を素人物を以て  
也

山崎園方

の元号を京都去雲寺通次郎の子に  
まこと

倭臣命世記の撰書

善尾の御款強なる  
のなるをくらし





中江藤樹

遺書をよみて、藤樹公の遺稿を讀むに、  
其の筆は、筆の極みの、その女に、  
力後の筆、一、致良知の二、その  
是、其の、一、其の、一、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、

仁心

仁心は、  
其の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、

其の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、  
其の、其の、其の、其の、其の、

## 孔子祭典會第三回祭典次第

午前八時半頃祭官伶人殿上座位ニ就ク委員長殿前石階ニ立チ挨拶ノ辞ヲ述ブ委員長復席スルヤ音樂作り祭典始マル祭典儀式左ノ如シ

- 一 奏樂乱聲
- 二 祓主祓詞ヲ奏ス
- 三 大麻行事
- 四 迎神式  
奏樂平調音取越天樂
- 五 奠幣
- 六 奠饌

七 祭主祝文奉讀 祭主ハ香案前ニ至リ燒香禮拜シ傳供ノ授クル所ノ祝版ヲ受ケ祝文ヲ奉讀ス  
滿場起立禮拜

- 八 奏樂五常樂
- 九 幣饌ヲ撤ス  
奏樂還城樂
- 十 送神式  
奏樂越天樂
- 十一 奏樂長慶子

(附記)

式後會員祭場拜觀

式後至午後三時先哲遺墨展覽 (附屬中學校樓上)

自午後一時至同三時公衆參拜 右終テ閉扉式ヲ行フ

自午後一時至同四時講演會 (一ツ橋東京高等商業學校大講堂)

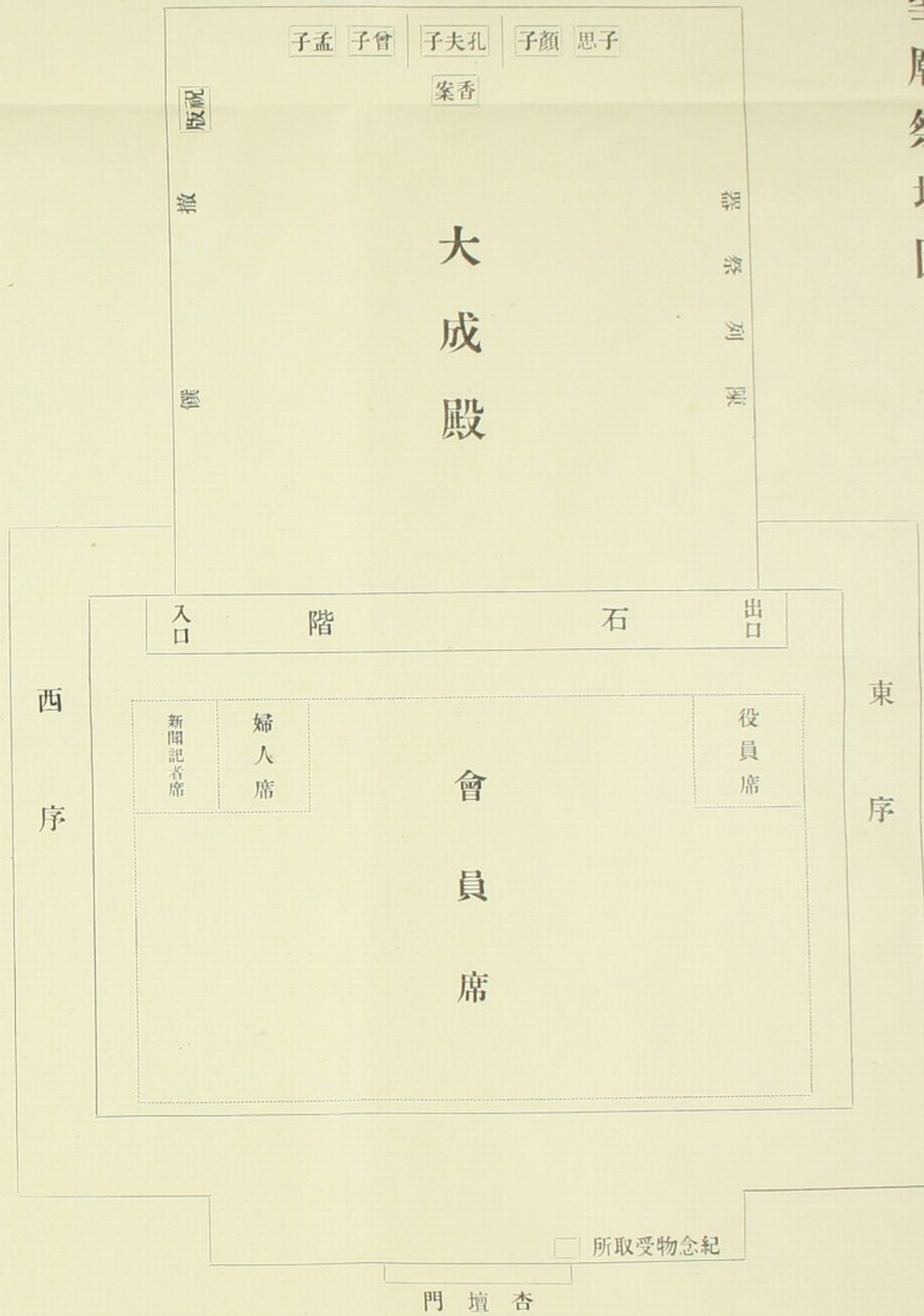
祝文

維明治四十二年四月二十五日安釋等謹ミテ至聖先師孔  
夫子ノ靈ニ告ク伏シテ惟ミルニ夫子道天地ニ配シ德  
日月ニ並フ風教徧ク東邦ニ被リ化澤永ク後昆ニ垂ル  
安釋等景仰措ク能ハス薄カ蕝藻ヲ奠シ以テ虔誠ヲ致ス  
配スルニ顔子曾子子思孟子ヲ以テス尙クハ饗ケヨ

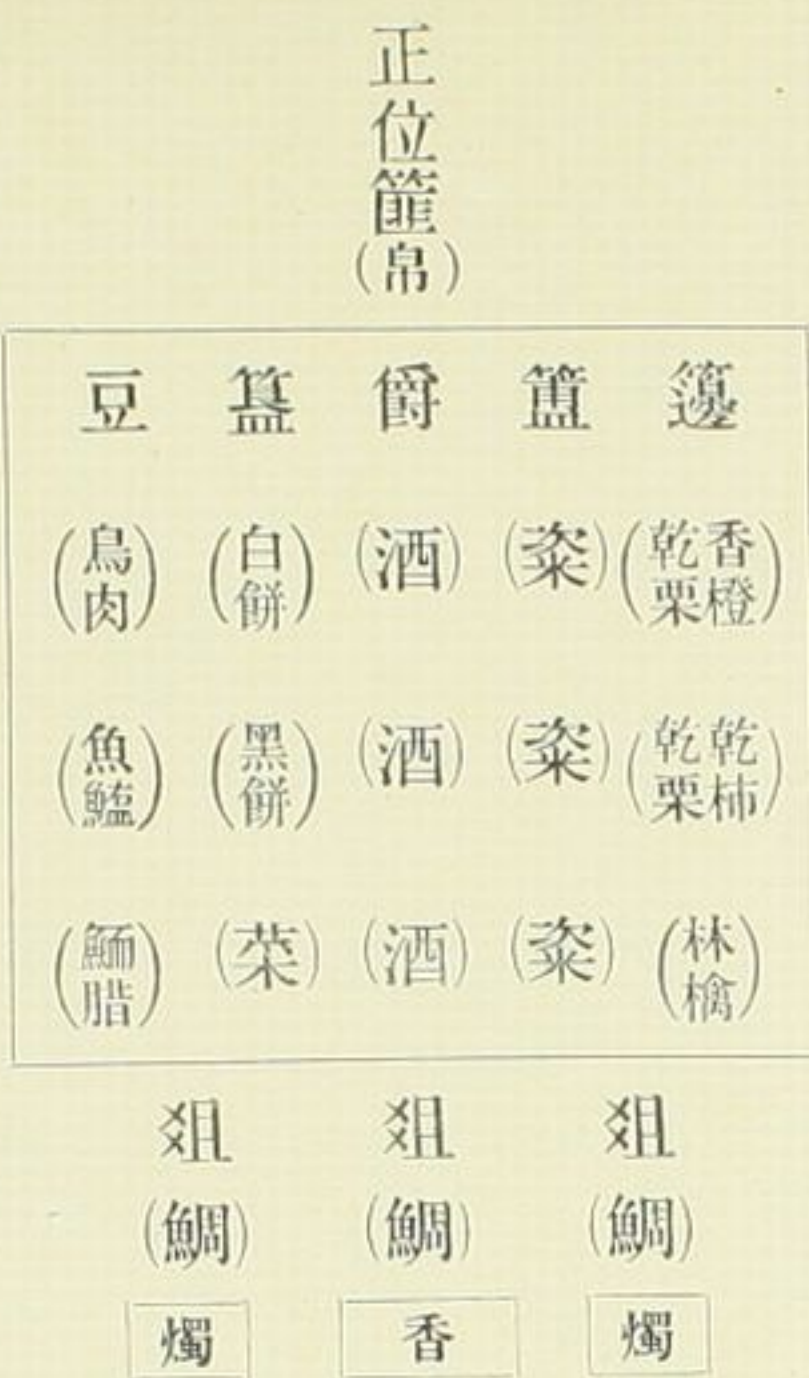
東京帝國大學名譽教授正四位勳三等文學博士 重野 安釋

表今より此の如きヲシリ可也と余快氣

聖廟祭場圖



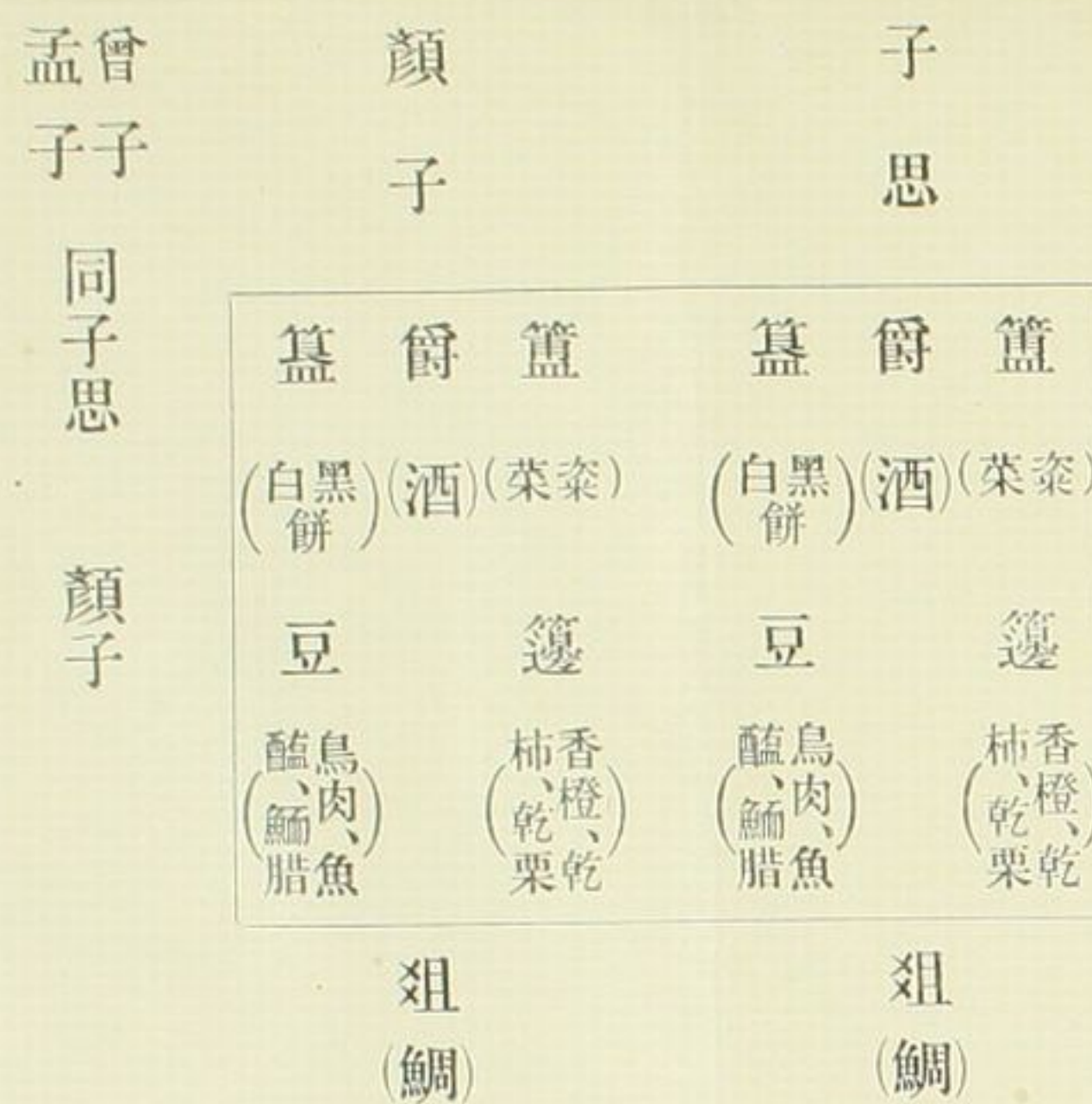
正位陳設圖



備考

簠一案、簋簠豆爵(各三)共案、兩燭各一案、香一案、三俎皆地ニ置ク「菜各一升共三升」白餅、蒸糯米一器五個「黑餅、蒸糯米胡麻子一升ヲ研シテ以テ之ニ衣セシム亦一器五個」鳥肉、鴨ヲ用ウ一羽ヲ醃藏シ切テ薄片ト爲ス「魚鮓、鮭魚ヲ醃藏シ切テ薄片ト爲ス」鮓腊、カラスミ亦切テ薄片ト爲ス「鯛魚一器一尾」帛、奉書五張ヲ卷キ朱白水引ヲ用キ中央ヲ結束「酒、淳酒」菜、青菁菜ヲ切テ寸斷トナス「果肉鮓腊亦簋豆ノ容量ニ隨フ

四配陳設圖



備考

簋籩豆爵(各一)子思、顏子共案、俎ハ地ニ置ク、曾子孟子共案、俎ハ地ニ置ク子思顏子ニ同シ「菜五合共二升」黑餅一器三個四配共十二個「白餅一器二個、四配共八個」鯛魚一器一尾四配共四尾「果肉鮓腊亦簋豆ノ容量ニ隨フ

35  
40  
45  
50  
55  
60  
65

○頃者花六日卯三刻と啼す偶々高橋桂  
 中を起すと云ふ花六日卯三刻と啼す偶々高橋桂  
 刀を視ふことを得ん花六日卯三刻と啼す偶々高橋桂  
 り啼す偶々高橋桂又云ふ花六日卯三刻と啼す偶々高橋桂  
 候之と花六刻と如く候へども一候と  
 桂中傍初真と候し亦一候の刻と云ふと  
 花六刻と候へども三候と云ふは余の  
 云ふ事と云ふ候へども桂中傍初真と  
 余と君のみめ候候候の方と云ふは余の  
 候す事と云ふ候へども三候と云ふは余の  
 君余の候候候と云ふ候へども三候と云ふは余の

復々を古河に



城四世家



撰古彩至妙



し撰をを柱九上巻の某事をもつて撰六を

瑞北園

撰六巻六並川流如を付のて有る流如流如  
と在位し山々々々人々々々余日一雨波有るを  
以て古彩を有る、歎流如のを有る、流如  
撰く事有る古彩如を有る、中々明流  
高旭畫く所の瑞北園ありと撰六  
聖四人書中一書尾流如の園をえ  
書尾流如と撰六を冠たる事有る故  
と撰く事有る撰六と撰六と撰六と撰六  
と撰く事有る撰六と撰六と撰六と撰六  
と撰く事有る撰六と撰六と撰六と撰六  
と撰く事有る撰六と撰六と撰六と撰六

瑞北園

蔚亭  
書

二道先生依款

時見乃如畫意  
〇〇

此人の伝書史分をひき、画史、景、依、系、  
：佩、之、書、畫、議、の、見、の、明、代、の、人、の、  
田、の、人、山、舟、の、畫、と、し、し、と、あ、る、也、  
蔚

京都行

四十二年四月三十日  
五月上旬

四月廿日、相済、舟、上、り、と、帝、大、圓、寺、詣、り、  
吉田、行、京、都、行、を、終、り、終、り、京、都、に、  
〇〇



の、圓、寺、詣、り、大、會、を、  
五月十日、終、り、し、あ、る、一、日、早、く、  
大、丸、を、人、に、打、り、振、え、る、の、言、葉、を、  
う、ち、に、改、革、の、任、を、あ、る、也、

二十日、早朝、京、都、幕、下、打、出、下、り、  
丸、の、社、を、出、て、即、ち、大、丸、を、  
終、り、と、し、あ、る、一、日、早、く、  
御、文、に、  
〇〇

着、御、其、の、鳥、丸、を、  
振、り、し、人、物、を、  
〇〇





龍井一室の又とて中殿のまじり  
若首とていふは金徳の御面をいふ  
の御面と御細彩も七七のしあはれ  
昔々の昔し得るは名狩命の御面  
のまじりしとていふは御面とていふ  
は

幅とるゝ重んじしとていふは  
うらもまじりしとていふは  
唯々本すまの御面掲げんは祝世祿  
の御面とていふは御面の花もいふ  
うらもまじりしとていふは御面

東海道

ひともまじりしとていふは御面

御面掲げんは祝世祿

吉市御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

余者御面掲げんは祝世祿  
を出しおさる、御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

御面掲げんは祝世祿

西條のあまを

せそお 大谷山丸 西條

吳十右の物あらし 若吉七三

十右也

日難支代木園

北條司直山松の 西條

岸祐園羽大陽

日難角一園大陽

吳十右 壽丈人

荒仲一鶴

三右衛門 七三

西條

夜る物子 賢や井山

光がとんきりのきりりこ

北の

定家の墨蹟 七三

ふまゆの具味と成し

玄と和歌集

奥吉の草

養和二年三月十九日 若吉

とあし

墨字の十五枚

月方 井山

由来考とあるところ

表題 後身考とあるところ

善居の細言のあらわし

阿彌の首とある

もと冷らぬ家系を存しつゝ民百の  
大曲の何れの内も家系大曲を  
のぞく物し 定家集式部外  
五五 邦会士五を括弧しつゝ  
年百二十貫(との筆ふちを  
る甲位)の括弧する所も  
まを括弧しつゝさるる所も

東洋書院

ふらり忘るる因も大曲の  
と船名所町内と括弧しつゝ  
抄本考に添りりつゝ  
らう

此一考を定家集一才の考と  
何れも又つゝ

七種あるの解説考一冊を  
主の考とせんつゝ  
ち

左巻の既評考とある  
、あつたりの考とある

議論おのほれいのみや

七粒のちおちきりるあぬふあふ

しあしとて

長崎の終りていへるあまゆも大丸のそまき前を  
巡りて先つは入内もあま、北まき関谷の軒  
をつらぬく大丸の仕入内を北まきに渡りて  
七あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
店と親換車あまゆのあまゆのあまゆのあまゆのあまゆの  
ふ大家あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
しとまあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも

東  
大  
丸  
の  
議  
論

店をいへるあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
末尾舖をいへるあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
お林のあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
全あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
所あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
とあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも

再びあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
しあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
五月一日あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも  
あまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆもあまゆも



陳列應書點教をるも満るめ教るし  
石物をうへうへまうし一箇目の二三を  
たうふうまう

孝明天皇御書

従本の押し七帖の法うつけたるもの  
其の初は杜山 翠山 (近衛忠尚)  
の題をうへうへまうし海屋杜山  
其他四五名海の法文を附せり  
刻せりる中村新井の刀で成り  
至印ありて糸品ありて刻せりる

東  
大  
東

足すや印の好き凡そ二十枚  
板迎春「和歌之印」をいふ  
お成り、印も又く  
花鳥花林者名日、  
るのとき  
此の櫛の刻印のよも  
るや舟子と出陣し

一五五五文

七五枚

山田延年(純)花

の島上人門人慶政も公井も

神楽

さうさうの宋の泉あり、  
中経上人をいふし、  
の佛名とアうい、  
まゝの御持を附し、  
〜の也 譯文の末

今時大宗嘉三十三丁丑花

泉物記之

とあり又方便院の印を押  
す

宋泥興版

一 大般若經

全上花

三聖寺花印あり

版式土蔵敷り三聖寺花印中一掃  
んまをより自ち也

一 福井の士集残問

神田考古齋花

幅二尺餘のしり

近道陰陽漢祓禊必平文奉

余作の一文と載す

是れ方版の上巻記一不為その一

部一かといえし

一 宋版

新河合注

同上花

藤原朝臣の朝若時神社より

納のしりし東鑑より載せあり

即ちえ、しりし題成あり

年譜中述古七年と記す

一 宋版白氏六帖中類集 宋本六帖

福井成房花

此書経修治古志より載せあり



この印は船橋氏花書である  
柳の傍に書あり入るある七葉書  
の模刻也  
此書御覧報解集の酷似する  
ものを御覧も見まはるべき也

一古鈔本白氏文集 田中幼六術本

此書ある早稲田の改刻に出し  
こしある言中白氏のこと  
単々文集とあるは白氏易名  
中一頁のる柳を傍に写し入る

東洋風書

僧宇傳言しあるは、ある本  
本の面白とある也珍とす

一古鈔本日本紀 日上花

零本 應仁天皇の部のみ  
書本 あり

此書白氏文集に比するは或ある  
きよあ書と定る見えすの  
恐くは日本紀編の考のね  
遠くは時代を定し  
即ちある

と云ふ事多し  
注脚を施し  
其の旨を考  
ふるに  
此書坊中の  
一決す  
と云ふ事多し

一 真山子集

杉浦五園藏

山中段 八行本 宋段覆刻

山中の段と珠也

版式鮮明此時代のものと云ふ



ハ致知のあり

一 阮元印譜

狩野直之藏

毛界白鳥、自刻の印を掲す

四冊本

阮元自書のものあり

阮元清刻のものあり

刀法漢書漢印の跋あり

一 韓知子翼毛託

定本

日上花

一 舊鈔毛詩正義

新簡

字彙強三卷

任書の正書しるしの一尺五寸許

二 攷民の字缺書ありし 珍とす

ど

一 北宋本史記

曰上巻

北を支那と稱し史記を版刻とす

とし是れその本也 常 熟 明 氏

の目録に解題ありし 北を即す

東本史記

えん北を 零本也 往年修の旨  
打寄りたるに北をを購ふるの  
一冊多し 北を貝の姉妹とす也

一 夏史の意

曰上

上田秋成日記 廿七卷の序

ありし 横巻一本

一 宋元禁修本廿一史

内 在湖南本

内

眉山七史

宋葉の修本

元新本の修本

三四史 隋書 南史 北史  
新唐書 五代史

元新本の由あるは其の故の出しとあはく  
宋版の時代は残存せしものも補刊  
し刷行したるもの欄心の素書八  
年の至十年補刊の銘ありと珍ら  
しきもの也版七他の粗るものも  
版の留置革命のものとるも其の  
とるものありとせ

東洋書院

一明月記

冷泉為系伯子也

文者まゝ定家自筆の記録を  
かゝるのありたりも大切なり

其尾に寛弘二年三月とあり

出海と一書ありも他とあり

りともあり

一上子太子制禁五十八ヶ条 一書

版本 上子 而森島をり

其尾に

推古天皇二十八年二月

臣 殿 戸 麻呂  
とあるは 偽古におもひ ちきりも 偽殿の  
揮毫とすしと 取扱也

一 降参(通)自(事)下(吹) 三 行(日)上  
三本行(支)也

一 里(川)通(祐)首(行) 上(村)初(支)也  
此(行)ま(く)地(証)に(関)する(事)を(し)座(向)  
方(志)編(纂)の(材)料 とも(い)ふ

東大寺傳束

東大寺傳束

一 古(字)鞞(邊)沙(女)論 空(如)回(古)師(系)  
天(平)正(保)の(轉)る(事)也

一 明(徳)二(年)の(年)節(あり) 日(上)花  
行(殿) 七(七)敷

一 安(井)鼻(抵)自(事)下 日(上)  
日(上)も(磨)る

此人(ら)の(磨)る(事)を(言)ふ(事)も(神)武  
天皇(の)一(の)況(草)に(も)如(の)終(る)

貞享一曆のふり

一 寛永版

日上

南浦文鈔

寛永版のころよりめま文書を  
ねらふ白の版のきき降るきを  
このまじし此版のり珠とす  
うまき

一 比古達文房文書の行

と村親光の

若あ付葉のり白也

ゆらうらうとせらるる

一 舊鈔法を事記方便の 中へ通る

白粉に附し

今をそと後をのり  
上まじし此のり  
換紙とせらるる

以上

貞享二年四月十日於京都御書  
院

三月二日午半期に智恩院に携る一河四十  
餘の寺々を同寺に属する寺實を携り出  
し敷中点示する時句短く悉く説く  
を得る一と遺儀也寓目の一の二三を  
考せし

法苑上人信事相 四十六巻

一と云ふは芝増上寺の持りたる  
傳書のあるる一と説く一なる  
り主派ありの各象の總目なる  
氏の花押ありを即儀の保  
有しありと云ふは保くありと

東林寺

十二門論疏 下目

善子を折帖に甚淺しなるもの  
善尾に法苑上人自筆の題あり  
あり疎書體にありもの題あり  
云々

壽永二年三月三日三論宗中及上人  
之本令比較し但件本者皆○之故  
未被校之本也未足為決之本也更  
以他●本等可校正可

源忠  
花押

一善哉八会金剛目三章 一巻

其尾題設云

天平神護元年四月廿一日東大寺  
僧具顯此書字者重内終不久  
當我其佛子迴此功德施法界  
皆於南内寐教の由米

此の天平寶字六年の

長河念十報法理 下

一巻ありし法隆寺一切經之印を  
捺す

此傳之珍々其感しるその二とありし

東大寺藏

一一

禮念彌陀道場懺法 三冊

折行とらうとんき版式 各巻に

紙をつぎなし冊子に綴りあり

り 版式多勢此版に似たり

いふも支那版と見えし

序と日本伝の古くは意書

扱めて在也序の年號 至順

とありし元代の版なりしこと明

らざるも大都大光寺位持

日本沙門至及とありし契



未だよくさるをも入るる所の傑  
物と云くはる

其處の成化四年の跋と附  
す又朝鮮人の肉舌の跋と附す  
珠くしきいふ也

他の一と

紅紙十六親紙

徹定の跋一書と添ふ右、此  
あり、康玄宗の宸翰行  
り、その果一と記すや  
と記すに、紅紙の跋と

梅と稱ん、そのふ、梅の  
蘇風、龍の裝飾あり  
形式、牡丹と梅と、  
ん、或る、梅と、  
を、泥と、  
後、文字と書き、三四枚  
毎、田形の中、日想、水想  
地想、梅と、池と、  
想像、梅と、梅と、  
き、  
徹定の記、  
高、祝、  
之と、

あると惜らるるは竟本のあり  
か

爛語を了つて更なる東福寺なる此寺五  
山の一也洲山を奉り宋唐に於て特なる余  
一行のころん陳列を為す、数十点の圓  
書中一宋版あり元版あり五山版あり  
一と列せり又皇道ありより左の唯れん  
るるものともるる

一義楚六帖

言書

宋版 大本 十二冊

外題 後陽成帝一宸書

東洋書院

一太平御記

宋版 大本 百數十冊

版本の雄々此の二書也  
言本中より存るる

一元亨粹考

全印

大易一次の花印ありと  
此考を此考より名借角  
関得るの書あり所此考  
ありありありと皇本  
又此考の二見不可

一 佛説心論

市岡葛寺傳寫一溪白文

とて

一 四河入海

五十四

施抄本

市其以後名徳の著しく

とて是れ言ふとて珠

をよむべきもの

一 曉風集

法華の印ありし

法華と所謂韓長志の

とて

一 懐中一香

数十卷

明彦とす本 果ある徹りて

笑雲法三のちとて

寺名徳のまこととて

在おの言を本寺に在る

心も實るともなきもの

書畫の印も抄を殊々目と数ありし

とて殊々余り高寺の金銀とて

とてついで初めとありありと

交回のたもこのを掲

北殿司

白衣観音圓

大幅

幅三三寸のり

曰

蓮座像

大幅

大きき曰上

曰

五乃羅澤圓

五十軸

之四

北寺之北寺の名物は何れ七古東飯堂  
すまのりもの物と教へてを要のち多殿司

東林堂製

草子に在りぬる具成を其、之  
この二あると

一と

殿司

五乃羅澤下圓

五十軸

之四

とらうきんとのり中と銘をだし示さ  
つるこの殿司の草子に在りて彩色をみる  
ことぬがしとありていふてを得誠  
と稀世の由也

他の一と

殿司草

四十祖像

とらぎ

祖像四十軸の由出しありしを

任山佛鑑録の

件通録の

の二冊を以てがみたる。殿司の書

法を以てしむるに於ては、

是れなり。

雪舟の圓しるす東福寺佛鑑の圓義

の圓しるす觀音三十三身の圓義

といふ改列しあるに、その數十卷の古書

七列ありたるが、一、二、三、四、五、六、七

の七列ありたるが、

午時度きちて、一行午時の鐘を

受て、料取を給持也。内、おのゝあき

は、おのゝあき、何れも、縁坊を、蓮の、庵、下、

右を、故し、その、も、考、し、る、は、る、ま、る、く、ん、ん、

汁 昆布 塩味を以て調理す

煮の豆を

落の煮を

空菜のひし

香の物

飯

おしめし、  
お麻を、に、す

白果て東寺は持ふ、こゝ七余の如き形  
高きと弘法大師の開創すること勿論  
南北朝の在り果ての開きし親智  
院とよぶ物より一りを以て準儀ありと  
あり別つ、院を定ん果て是れも昔し  
由ある古刹のありけり、聖画襖  
をもとすして宮本武蔵の草下とよぶ  
と別ありとよぶ手せりす保度七五七  
のころと惜らるし

東寺  
御書

このへき、東寺の記并に入唐求法  
記の記七地寺の身も東寺の記と出  
しありと、が此の記と出しありと  
ありと、田仁草下とありと  
例、位、室目の丸物二三を掲ぐ

一 後宇多帝御書

弘法大師御書

御書草力献勤此々我  
邦一代帝王御書之白眉  
うん

後宇多天皇

乙辰年

具注曆

曆を文保三年のこもり也

手紙の支者あり也

具注曆のこもりのこもりありと改を

てんし 殊に帝家の御年を

を記し 尤も昔の事なりとの也

一 弘法大師の遺言

師の人海の大正とありて考へ

東海傳記

る。然らば、弘法大師の遺言に

師の遺言の御年を記すことと

御年を記すこととありて、

亦、弘法大師の遺言に、

之を大師の御年と記すことと

ありて、弘法大師の遺言に、

此の御年を記すこととありて、

と

一 弘法大師の御年

弘法大師の御年を記すこととありて、

原本六枚幅縁尺九寸収三四尺  
七八寸位のより画をぬきつゝの幅  
寸も挿入しし宛るる寸の鑑  
図のみを之を唐画と云ふは日  
本の古畫と云ふと少くも

一七祖像 三四二幅

この又南寺に於て之を之の大師  
の筆のこの大師の元の体文と  
七祖のなるものと評云と各幅一  
ありて之を二幅の幅ありと

この法則を之を洋画の  
模本として原品を之と云ふは  
ハ畫成也

此の大師の節と傳ある十二天佛画  
及び之の筆に神多き又狩の之は  
波房(一)傳るる流の額ありと畫く  
其の數は一の貴重と云ふと傳  
しと云ふる也

此物の數も傳ありしありと云ふ  
を驛かして之を弘法師の筆と傳  
ある也



大朝臣其甚るるに体おれ其殿礎に  
唐の作と見へし又波子も銀細の  
かえり心おれ。法持るる子也  
別言の於て古文書十枚函の海列を  
るる一函をるるを倉親とるる取  
寺の文書とて定ふ年（天平）城と天平神  
護国寺宮内院の文書とて定ふる御山とて  
文書とて定むるを此とて此の寺の御書と  
るるん歎  
境の寺教系してアセ合とるる又三洲の梵

字をまける碑とるる

此碑

佛頂尊徳院石碣

表面上中又田所の縁を  
書しやの細字の梵文を  
きり田所の外に細字を  
り彫刻せりともあ也  
ある村の書也  
七と北や考る親由とるし  
其文意をりかこし物とる  
碑の右側を刻しとる

本碑と表裏交差且建つ事也  
碑の右側上層に銅板  
拵めありしに此中  
細好ありん銅板と紙と細  
めたるにらん歎

此碑と母の碑と一處と  
きこゆ也 傳り楊子一處と  
得んことを記す

本り三寺を遍歴し唐宋元明の四朝を歴  
親しむるの感ありしを夢想しとありし  
且つ似也の代を代とすしとありし東福

寺と壯麗也宋元と述べてしと東寺  
ありしと古樸質簡なりし深故ありし唐を  
代表す傳し一〇唐宋元明と流傳す有  
とありしとありしと唐代よりありしと  
當年の漢の魏の碑ありしとありしと  
一處を記すなりしとありしとありしと  
一行とありしとありしとありしとありしと  
傳ありしとありしとありしとありしと  
大壇のありしとありしとありしとありしと  
丸也のありしとありしとありしとありしと  
之入麻りまけりしとありしとありしとありしと

市丁今も最知らししすのたうと之をよき  
目し且つ之を以て人喜ぶたの者とし  
て人の作らるる思ひ出しし事  
もたんに稀絶するは主人の心也余は  
て僕也とて呼ぶ主人をいふ自ら  
て言ふとらんとて余能くして余  
ふふ同く市中の事家も木米の肉  
干とをたす事ありて木米の肉  
ふも其家の典しなるおあも  
の型と入る直に型の他人を  
ことを世に一型全く深き事あり

東洋書院

す唯此地の香炉の型のみきき  
え印も又型を以て作る也と香  
様式も式も式も式も式も式も  
云い流名も名も二人の垢力の  
うもさるる印も垢も垢も垢も  
ふ此書の型と入るるも方所の  
ちを米ありちりて 室の形あり  
又「室の形」ともしちりて

と秋枝をよきもの本とて今も和  
帝大回ち候と 二人とて今も和  
の二人と候はす、湯浅大西院は白

と因志社時代の日記也酒次史の事と  
後々此の噴飯を修く事と云ふ事と  
次々此の日記を修く事と

三日書りてりある言説を修の修を修  
余修の修を修し大なる人と云ふ事  
修く修の修を修し修く修の修を修  
正に画修を修し修く修の修を修  
余の修の修を修し修く修の修を修  
と修の修を修し修く修の修を修  
の修の修を修し修く修の修を修

年々修の修を修し修く修の修を修  
前日と日記しある事と云ふ事と  
用ひ修の修を修し修く修の修を修  
修の修を修し修く修の修を修  
冊と云ふ修の修を修し修く修の修を修  
の修の修を修し修く修の修を修  
え後山中一修の修を修し修く修の修を修  
修の修を修し修く修の修を修  
修の修を修し修く修の修を修  
修の修を修し修く修の修を修  
修の修を修し修く修の修を修

在りて之を武橋印學一書と得た故に  
 其の記する爲家多流見たり其の先代の輯  
 成するなるを考ふる事多し其の書は  
 大雅心紙里茶 唐の印 其の書 徳南  
 海舟の印とあり 其の印 其の書 徳南  
 一少冊と記す 余の得たるは大本を標  
 題の下に 徳南とありし書一冊ありの手  
 澤在りて 徳南の印とありし書一冊あり  
 出入あり

友人向吉に本訪問ありし事と伝ふ向吉は  
 仁和寺千代大師の書の三十餘冊を一通

一冊を以て其の書と傳へ 此は印三種類  
 寸幅二寸許の書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書  
 一冊ありし書とありし書とありし書とありし書

新井留三の書とありし書とありし書とありし書

火災係諸君の此の支那人たることを来りし時を以て  
了流のあつたおのりしものありお井向くあ  
甲の數七十と認めしに成るる子ありしを完  
分若干年と全社員に分配する流股持  
の一案と添くし回し是れ備ふるにありしを  
扱ひしよりし年より出て勤勉力行儉素  
と分ししとるあるとありしを儉素と  
書成りたる御書より回ししとるは儉  
儉素と分ししとるし得るものとありしと御書  
とつとるよ今卯よりとるし勤勉とありし  
其の之れを其のよ少額とつとるしとありしと

其を以て御書を以てしつとるは底を以て他の  
めより市家とつとるしと其のありしを親使  
用人の等勤務年測よりしとるは  
多とつとるありしとる田傭の役のありし  
ありしと二十田十日のありしと分り  
善し節なり古稀の紀念として其の  
とる一人の死に際してありしとるは  
の十一弟田に在りしとるは  
てはありしとるありしとるは  
ありしとるありしとるは  
條件を附するにありしとるは

後自家の御りついに勢なりしと、  
とどころとも義人の人せと  
四のちかたはるも意欲くしつに可もさへ  
おまきりおまに振ふる。別書まき洛東心  
林寺附通る上馬竹字の松原ともよみ  
ちり、入るとあるまじりおしひらき、蛇の  
狭きふまをこころり家のあまき、こころ思  
能ふんを入ると見んは、其まをそく前背  
こ浦田のまはせあること、とりはあまの  
庭つこととるこころとあつ、うぬ、此地き地  
のこころも別り勢の中、樹を、溪河を利

東林寺

用にとるる言となる。せきを埋ちるを教の  
概樹をのえと、流をさるるを、とる言はし  
ゆひさき、新家のまの、中、積りおま、編ん  
とするの概あるは、此は三、生の、光の  
ちか、まき、ちか、母、亭、樹を、言、み、なる、り、お、  
自、れ、の、教、澤、も、云、り、ん、が、一、橋、二、寺  
ある、は、つ、る、家、を、ね、む、新、中、丁、茶、亭、の  
お、梅、も、余、つ、る、言、を、あ、ら、う、ひ、り、人、余、と  
後、け、の、う、め、の、中、に、し、ま、さ、き、茶、亭、を、ま、さ  
ふ、ゆ、こ、ろ、端、午、を、あ、ら、う、ま、あ、る、を、め、る、物  
と、い、う、ま、(馬、を)、ま、あ、ら、う、ま、あ、る、を、め、る、物





心ゆく自らるゝいよを元とるる。午後瓶  
書きて飛ひ花のゆきをまきく。此の主人  
好まらぬ其の跡を花のすを村の隅とんとも  
まし前りのおと郵：書遣い念親に  
張余の責勤しる畫師中の一也  
附言 京都紀行のさくを以て終る  
と告ぐ

三子

おとせとて、おとせとて、おとせとて、  
おとせとて、おとせとて、おとせとて、  
おとせとて、おとせとて、おとせとて、  
おとせとて、おとせとて、おとせとて、  
おとせとて、おとせとて、おとせとて、

心動く自らもいふを記さるる午後飛  
舟をて飛舟の御名をさるる此の主人  
野々々其の跡を舟の舟を村の所をいへ  
善し前りの村を舟の書意を念観に  
陸余の賞歎しんる畫幅守の一也  
附言 京都にりさるる之を以て終る  
を告ぐ

左の収ちるる大塚のいふもるヤ松  
あま果記さるる之轉るのいとま  
あまあまのいふもるあまの  
三

我者松阪とは芳き子の海を  
我るを記さるる創成のいふ  
をて寺記とすしるる此の  
代も利家の書に記すに  
こに洛東馬町の舟を芳き  
中あまのあま果記さるる中  
彦白舟舟公の好くる心所  
利に記すしるるあまの舟  
記すに記すしるるあまの

我若梅段之付芳女子の啓  
長くぞおれし〜 剣道いひに  
をもて寺詣 ことし〜 此も  
代にも和歌の書は控ふを  
こに送束馬町の幸を  
そめのおの葉を〜 中  
唐白方袖公の好なき心取  
利に返し〜 候幸はし  
此記あり〜 此  
お書かと唐司知〜 玉  
うえ文甲の末の六月の  
即幸し〜 唐白方  
菩提子の園と〜 候  
をし〜 此  
を京師の下町〜 此地  
のふに〜 此  
又をぬ〜 此  
を甘〜 此  
亭とい〜 南  
山一亭と黄葉の〜 此  
御家の宮前〜 此  
浪花のふ〜 此  
の御所の〜 此  
も〜 此  
も〜 此

そとに...  
を...  
の...  
又...  
を...  
山...  
瑞...  
洗...  
の...  
を...  
を...  
の...  
は...  
と...  
し...  
あ...  
は...  
と...  
し...  
あ...  
を...  
の...  
と...  
あ...  
は...  
と...  
あ...  
を...  
の...  
と...  
あ...  
は...  
と...  
あ...

仙人の苦念の記

辛亥七月二十八日  
大伴氏

心切く自さるゝいふをいふさう、午後五時  
廿五分に飛出たの御音を聞き、此のまゝ人  
知るゝ其の跡をたのむを村の隅にいてま  
ゝをし前よりおとす郵：書道念親に  
際余の賞歎しと書幅中の一也

おとすの書道念親に  
際余の賞歎しと書幅中の一也

今度の園遊は終つたから行く能  
はさうとて、城をいふ佛と  
園遊は、城をいふのまゝお  
園遊も、城をいふのまゝお  
とたのめ

五月から白京の父  
あつた

南都佛教圖書館展覽列品目錄

公慶上人書簡

貳卷

正倉院古記

寫本

六卷

内

東大寺獻物帳貳卷

樂毅論杜家立成寺卷

正倉院出入帳貳卷

延曆十三曝涼目錄壹卷

華嚴經傳記

五卷

建治元年宗性僧正跋文了料紙後嵯峨天皇下賜

南都大佛修復勸進帳

壹帖

貞享二歲(淨財喜捨ノ名ヲ記セルモノ)

四分律比丘尼鈔

宋版

九帖

聖府南山松樂院住持賜紫慈濟大師宗始此鈔極壹卷并與

東福寺

書アリ

真言院再興上表

中道之聖秀筆弘安三年各

壹卷

真言院再興略記

古文書

寛治七年

活却古文書

弘安元年

拾五枚

二月堂過去帳

足利時代

壹卷

云倉院御宝物圖模寫本

七卷

世尊寺行尹卿真蹟

享徳元年

壹卷

八階宮繪入縁起

繪詞 西室院公順筆 画三宗軒

貳卷

二月堂縁起

貳卷

上卷絵詞三段後奈良天皇震翰七卷後三段青蓮度尊鎮

親王筆下

下卷繪詞三段西室院公頓悟心筆。下卷後四段亦名院公勝公筆。  
重工亮順

圓照上人行狀記

凝然國師筆

參卷

觀音誦式

建仁元年解脫上人筆

志卷

大佛棟引圖

古淵和上筆

志卷

尊氏公書翰

志卷

尊氏公義持公義政公御書并畠山言

志卷

大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔

志卷

大安十年甲戌歲高麗國大興王寺奉宣雕造

大方廣佛華嚴經隨疏演義鈔

志卷

壽昌二年丙子歲高麗國大興王寺奉宣雕造

文選

寬永版

拾冊

大宋眉山蘇氏家傳心學文集大全 朝鮮版

貳拾八冊

二月堂修二會日記 大治六年ヨリ文永六年ニ至ル

志冊

(重衡南都暴動ノ實況記入アリ)

東大寺勅封藏目錄 建久以後寬元以後

貳卷

弘安十一年四月大勸進沙門某誌ノ與書アリ

大乘大集地藏十輪經 元慶二年九月三日丙寅日交校既了

貳卷

說一切有部發智大毘婆沙論

志冊

建久二年歲次辛亥二月十三日書寫了爲興隆佛法

奉書寫一切經内也願主 主稅允中原行盛

中論疏記

千時正元元年三月七日寫了

金陵末資玄空坊藏海

志冊

調伏異朝怨敵抄 宗性筆 蒙古國牒狀 文永五年ノ與書アリ 志冊

日本高僧傳要文抄 權大僧部宗性筆

參冊

建長元年二月十五日巳時於東大寺知足院別所信願文  
御房御卷宣抄之畢

法華經

古版

寺冊

右教心兼勸奉施入處如件嘉吉元年卯月言施主尼都阿弥

大衆入道次第

嘉文永年庚子月亥於西大寺錄△△(此則不明)

寺冊

四分律刪繁補闕行事鈔

寺冊

首建長四年四月日寄泉涌寺勸進比丘宮宗靜

四分律念誦戒本疏行宗記

寺冊

正安元年九月泉涌寺沙門寬阿譯剛印(真書P11)

防州佐波郡牟礼村國衙村打渡坪付帳

寺冊

慶長十五年庚戌七月七日

園大曆

黃紙寫本

五冊

東

鑑 慶長版

寺冊

大周刊定衆經目錄

宋版

貳帖

東大寺要錄

建保三年

(關寶)

寺放

大和國繪圖

享永三年四月南都御齋所御繪圖寫之

寺放

東大寺境内古圖

筆者及年代不明

參冊

華嚴五教章

弘安六年秋九月日沙門禪不謹誌

貳卷

般若心經畧疏

支那版

寺冊

總然國師表書天正七年六月 花嚴宗末葉矣(英ノ)

不空羅刹神呪心經

春日版

寺冊

大方廣佛華嚴經

宋版

寺冊

大乘阿毘達磨雜集論

天平時代馬道筆

寺卷



華嚴經疏刊是記

天平時代古寫

四卷

一卷六安宿唐成十一月廿六日了及石作馬道校正與書アリ

一卷三六廿本積唐正了跋アリ

東大寺燒經斷片紺紙銀泥

大宋高僧傳要文抄并三指示抄

三張

嘉禎年間款宗性筆

永仁七年具注曆

紙背維摩經新簡

一卷

探玄記洞幽鈔

紙背古文書延慶二年處然自筆

上宮太子維摩經義疏

三卷

下卷々末缺春日版文永六年加点與書アリ

法華義疏

永仁三年版

一帖

五箇金經新記

永仁六年泉涌寺教禪刊

覆宋版本

一帖

大方廣圓覺修多羅了義經略疏

二冊

裴休著

春日版

前後二帖畫アリ

四

菩薩戒本宗要

正平十四年僧處刊

注華嚴法界觀門

一帖

應永年間覆宋版本寬政三年有憲和書入アリ

般若波羅密多心經疏

一冊

覆宋本文明十一年ノ與書アリ

高麗大藏目錄慶長八年版

三帖

佛說佛土寶德藏般若波羅密經 北宋大觀元年版

一帖

夾料華嚴經甲上 南宋紹興五年版

於六帖

諸文戒行門

元版

一冊

說文解字補義卷卷ノ七永樂六年朝鮮版

一冊

論語集註大全 朝鮮版本

一冊

朝鮮四佛國寺繼創記 乾隆五年朝鮮寫本追記

一冊

老莊翼註

焦竑著 萬曆年間版

六冊

具注曆 勅明筆  
十地論 建永二年八月，真書

亮冊  
亮卷

以下寶庫陳列

功德經 良辨信正筆  
賢愚經 聖武天皇御震筆  
大愛道比丘尼經 光明皇后御筆  
阿難四事經 孝謙天皇宸筆

卡  
亮卷  
亮卷  
亮卷

三

〰

〰  
東大寺

